

山本周五郎全集

第五卷

講談社



山本周五郎全集

第5巻 ほたる放生

昭和39年1月20日 第1刷発行

定 価 480円

著 者 山本周五郎

発行者 野間省一

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社 国宝社

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽町3ノ19

電話 東京(942)1111(大代表)

振替 東京3930

© Shugoro Yamamoto 1964

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

山本周五郎全集 第五卷 目次

日日平安	三
四日のあやめ	三
月の松山	五
しじみ河岸	七
大炊介始末	一〇五
夜の辛夷	一三五
かあちゃん	一五三
釣忍	一七七
ほたる放生	一七九

水たたき

二九

しゆるしゆる

二四

裏の木戸はあいている

二五

こんち午の日

二六

なんの花か薫る

二五

将監さまの細道

三九

並木河岸

三三

薊

三三

解説 吉田健一

四〇

デザイン 伊藤憲治
カメラ 秋山青磁

日
日
平
安

一

井坂十郎太は怒っていた。まだ忿懣のおさまらない感情を抱いて歩いていたので、その男の姿も眼にはいらなかつたし、呼ぶ声もすぐには聞えなかつた。三度めに呼ばれて初めて気がつき、立停つて振返つた。

道のすぐ脇の、平らな草原の中にその男は坐っていた。松林と竹藪に挟まれたせまい高原で、晩春の陽がいっぱいに当っている。浪人者とみえるその男は、坐つて、着物の袴を大きくひろげて、蒼白く瘦せたひすばつたような胸と腹を出していた。月代も髭も伸び放題だし、垢じみた着物や袴は継ぎはぎだらけで、ちよつと本当とは思えないくらい尾羽うち枯らした恰好である。年は二十八か九であらう、顔は蒼黒く、頬はげっそり落ち窪んでいるし、顎は尖つて骨が突き出ているようにみえた。

「呼んだのは貴方ですか」

「そうです」とその男は領ずいた、「——ちよつとお願ひがあつたものですから」

十郎太はそつちへ戻つた。相手の男は左の手で腹（そのむき出しになつてゐる）をなでながら、右手に持つてゐる抜身の脇差をひらひらさせた。もちろん、切腹をしようとしてゐるのだということとは明らかである、けれども十郎太

は気がつかなかつた。彼の頭はまだ怒りのためにいっぱい、他人の事に関心をもつ余地などなかつたのである。

「用はなんですか」

「えへん」とその男はまた脇差をひけらかし、それからちよつと媚びた眼で十郎太を見た、「まことに申しかねるが、懐紙をお持ちなら少少お分け下さるまいか」

十郎太は黙つてふところから懐紙を出した。相手はそれを受取ると、札を云いながら、すばやくその紙で抜身の七三のあたりを巻いた。十郎太はそれでもう用はないと思つたのだらう、そのまま道のほうへ去ろうとした。そこで男はあわてたようすで、うしろからまた呼びとめた。

「その、まことになんですが、その」

「まだなにか用ですか」

「はあ、じつはその」と男は云つた、「——ごらんのとおり私は、切腹しようと思つたのですが」

「そうですか」と十郎太が云つた。

「そうなんです」と男が云つた、「——それであれです、じつに恐縮なんですが」

「介錯たせくをしてくれとでもいうんですか」

「そうです、つまり」その男は領ずいた、「——もし願ひたら介錯をお頼みしたいんですが」

「いいでしょう」

十郎太は戻つて来た。その男は十郎太を見た。十郎太は刀を鞘ごと取り、下緒さげおをはずして襷にかけた。それから静

かに刀を抜き、鞘を草の上に置いて、身構えをした。その男は明らかに狼狽し、泣きそうな顔になった。

「貴方は本当に介錯するつもりなんですか」

「本当にとは」と十郎太がきいた、「——だってそう頼んだんでしょ」

「それは頼んだことは頼みました」と男が云った。「——けれども、だからといってそう貴方のように、そう安直になにされるというのは、ちょっと私のほうとしてどうかと思えますね」

「どうかとはどう思うんです」

「どうと云って、その」と男は口ごもった、「——それは多少その、不人情だと思うんですが」

「ああそうですか」十郎太は領ずいた、「——それなら私はいそぎの旅なんだから、じつはそれどころではないんだ」

そして刀に拭いをかけて、鞘を拾っておさめ、襷をはずして下緒に付けた。その男はそのようすを不安そうに眺めながら、もつと不安そうにきいた。

「すると貴方は、いつてしまふわけですか」

十郎太は黙って刀を腰に差した。

「私を置いてですか」と男は云った、「——切腹しようとして私を置いて、その理由を聞こうともせずについてしまふんですか」

「ではいったいどうしろというんです」

十郎太は少し痲癩を起しかけた。ここに至って男は度胸をきめたらしかつた、彼はもう居直つたという表情で云つた。

「貴方のお人柄をみこんでお願いします、私は空腹で死にそうなんです、すみませんが御所持の中から少し拝借させてくれませんか」

「金ですって」十郎太は眠りからさめたような眼で相手を見た、「——すると貴方は、そのために切腹しようとしてゐるんですか」

「手っ取り早くいえば、そうなんです」

「それはどうも」十郎太は相手の姿を眺め、まだ納得がない顔つきだったが、ふところへ手を入れて紙入を捜した、「——私もそうたくさんは持っていないが、これから江戸まで帰るもんですからね、しかし」

ふところには紙入はなかった。彼は首を傾けながら両の袂を捜し、「ちょっと待って下さい」と云って、背負っていた旅囊を解いてしらべ、小さな財布をみつけてまた首をひねった。彼がその財布をはたくと、中から小粒銀が一つと若干の文銭が出て来た。彼はいふかしげに眉をしかめ、「はてな」とつぶやいた、「今朝あの宿で払いをするときに、——」こうつぶやきながら、うわ眼づかにじっと、どこかをにらんだ。

「どうかされたんですか」

「ちょっと待って下さい」と十郎太は記憶をたどった、

「——ちょっと考えてみるから」

十郎太はよく考えた。そうしてやがて、紙入は伯父の家
に忘れて来た、初めから持って来なかったということと思
いだした。

「しまった、なんというばかなことを」

「わかったんですか」

「戻らなければならぬ」十郎太は掌にある銭を見ながら
云った、「——戻るなんて業腹だが、これでは江戸までゆ
けやしない、これでは三日の道もゆけやしない」

「よかったですね、いまいだして」と男が勇みたつよう
に云った、「——もっと先までいってからだと大変でしょ
う、お屋敷はどちらですか」

十郎太は城下町の名を告げた。

「ああそれなら、十里とちょっと戻ればよい」と男は云っ
た、「——藍川で泊れば明日の午前ちゆうには戻れますよ、
まったく世の中にはなにが仕合せになるかわからないよう
なことがあるものですな、ひとつ私もいっしょにゆきま
しょう」

「貴方が、いっしょにですか」

「乗りかかった船ですよ」と男は袷をかき合せ、脇差を鞘
へおさめた、「——ふしぎな縁でこうしてお知りあいにな
って、貴方がそんな立場に立っているのを黙って見過すほ
ど、私は不人情な人間じゃありませんからね、それはや
がてわかりますよ、ええ、しかしともかく」と男は立ちあ

がりながら云った、「ともかく向うの茶店でなにか食べる
としましょう、まず食っての相談といえますからね」その
男はすっかり陽気になっていた。

二

その男は嘘は云わなかった。その男は「私は不人情な人
間ではない」と云ったが、まもなくそれが事実だことを証
明した。

二人は茶店で腹をこしらえ、あと戻りして藍川の宿の
柵屋ひらやという（十郎太が昨夜泊った）宿で草鞋をぬいだ。二
人はお互いに姓名を告げあい、風呂のあとで酒を飲んだ。

その男の名は菅田平野というのであった。十郎太は二度き
き直して、「すがたひらの」と口の中で云ってみたうえ、
「名前も苗字みたようですね」と云った。菅田平野は北越
の浪人で、十郎太より三つ年長の二十九歳であった。

菅田平野は聞き上手で、しかも、座持ちがうまいといわ
れる種類の人に属していた。十郎太は勘定が気になるの
で、はじめのうちは酒の数に注意していたが、話が進むに
つれて（その話の性質上）やがて気分が昂揚し、自分から
景気よく飲みだした。

「よくわかります、うん、私にはよくわかるな、それは」
菅田平野はしんみり合榎を打つのであった、「——しかも
陸田さんはなんにもなさらない、超然としてかれらのする
ままにしているというわけですね」

「いや貴方にはわからない」十郎太は首を振った、「——元来が私は政治などというものに興味はないんです、しょせん政治と悪徳とは付いてまわるし、そうでない例はないようですからね、しかしそれにしても国許の状態はひどい、まるでもうめちやくちやなんだ」

「わかりますよ、私も御領内を通って来ましたからね」と菅田平野が云った、「——あんなに百姓や町人の窮迫している土地も珍しい、あれこそ苛斂誅求かれんちゆうきゆうきうという言葉ついでしようが、到るところ怨嗟うんさの声で充滿しているという感じでしたからね」

「もっとも悪いのは、かれらがその声を無視することです、家中にだつて批判の声が起っている、若い人間のなかにはしんけんしんけんに思い詰めている者も少なくないんだ、しかしかれらはそういう声をまったく無視して、私利私欲のために平然と政治を案っている」

「それでもなお陸田さんは、城代家老としてなにもなさろうとしないんですね」

「日時事みな平安なり、そう云うだけなんだ」と十郎太は唇をゆがめた、「かれらの悪徳はおまえがすでに知り、おまえの仲間が知り、心ある者が知っている、もはや隠れることはできないし、腫物はすでにうんでいる、まもなく自分からやぶれるだろう、伯父はこう云うだけさ、世の中は晴天ばかりということはないものだ、五風十雨は泰平の兆し、そうのばせずにおちついておれとね」

「それもわかるが、私には貴方の怒る気持もわかるなあ」
「われわれは日日平安などと云ってはいられない、ものには限度ということがある」十郎太は眼をぎらぎらさせた、「——かれらがそんなにも無恥陋劣で、その悪徳非道にためどがないとすれば、これを抑える法は一つしかないでしょう、私はそう決心した、私の決心に賛成する者が九人、それぞれが持場を分担して、事を決行しようとしたのです」

「それが事前に露顯したわけですか」

「いや、かれらにはではなく、伯父に勘づかれたんです、もっとも詳しいことは知らないでしょう、なにか不穩な事を計画しているという点だけ勘づいて、それで急に江戸へ帰れということになったんだと思う」十郎太は怒りと嘲笑とでむかつくような顔をし、それから投げやりな調子で云った、「——そっちがそう出るなら結構、私はたつて千鳥の婿になんかなりたかあないですからね、江戸へ帰ってみんなぶちまけて、もちろん、殿に直訴しますよ、そうしてこの世にはまだ正義というものがあるんだということを、かれらに思い知らせてやるつもりです」

菅田平野は考え深そうに頷ずいた。

風呂へはいったとき、菅田平野は（十郎太の剃刀を借りて）月代と髭を剃ったから、いま彼の顔はさっぱりと清潔にみえる。もう酒もずいぶん飲んで、相当に酔っているはずなのだが、その顔は赤くならず、むしろ平靜に冴えてゆ

くようであつた。彼は十郎太の話をよく吟味するかのよう
に、しきりと思ひ耽りながら鼻毛を抜いた。右手の拇指と
食指の尖端で巧みに鼻毛を摘み、くいと引張つて抜くので
あるが、抜いたとたんに彼は大きなくしゃみをした。

「失礼しました」と菅田平野は云つた、「——これがものを
考えるときの私の癖でしてね、どうも失礼」それから抜
いた鼻毛を眺めながら続けた、「これは私の杞憂かもしれ
ませんが、まあたぶん杞憂だろうと思つてますが、そうい
うことだとすると貴方がこのまま江戸へ帰られるのは、私
としてはどうかと思つますね」

「どうかとは思つますね」

「どうかと思つて、その」と菅田平野は口ごもつた、「——
そんな状態だとすると、陸田さんが苦境に立つことになり
はしませんか、貴方が江戸へ帰つて殿に直訴して、もしそ
れが成功するとすれば、城代家老としての陸田さんの責任
も追究されるでしょう、それよりも、私はそのまえに奸物
どもが策謀して、罪を陸田さんになすりつけるような、
……むろんこれは杞憂だと思つて、奸物どもとしてはその
くらいの謀略はやりかねない、私はそのことを心配しま
すね」

「するとどうしろというんですか」

「私が云わなければならぬでしょうか」

菅田平野は十郎太の顔を見た。同時に、菅田平野は頭
中で考へていた。

——おれはこの機会をものにしてやるぞ。

彼はゆき詰つていた。こんな放浪の苦しみはもうたくさ
んである、わずか一食の銭を得るために、切腹のまねをし
なければならぬところまで来てはどん詰りだ。ここはぜ
ひともこの（単純そうな）男を城下へ伴れ戻して、ひと騒
動おこして手柄をたてさせ、ついでにおれも仕官するとい
う手だ。仮に仕官ができなくとも相当な礼金はくれるだろ
う、おれは絶対にこの蔓は放さないぞ、と考えるのであつ
た。

「という、つまり」と十郎太が云つた、「——私に計画
を実行しろというのですか」

「及ばずながら助勢しますよ」

十郎太はうなつた。うなつて、盃をぐつとあおつて、そ
うかも知れないと思つた。

「考へてみよう」と十郎太は云つた、「——云われてみれ
ば伯父の立場は危ない、日日平安などといって、足もとの
崩れるのも知らずにいるんだから、それに、……千鳥だつ
て考へてみればかわいそうだ」

「さっきも云われたようだが、その千鳥というのはどうい
う人ですか」

「伯父の一人娘ですよ」と十郎太は云つた、「——私は婿
養子になるはずで、三年まえにこつちへ呼ばれて来たんで
す」

「御城代の婿養子」

「つまらないことを云いました」と十郎太は首を振った、
「——もう切り上げるとしまししょうか」

三

枕を並べて寝ると、菅田平野はたちまち眠りこんでしまった。食べたいほど食べ、飲みたいだけ飲み、温かい夜具に入ったのだからむりもない。横になるとすぐいびきをかいて熟睡した。十郎太はしばらく寝つけなかった。菅田の云うようには決心がつかないのである、いちど燃えあがった火を消されたばかりなので、その火がすぐには燃えつかない、というような感じであった。

「あの黒藤源太夫め」と彼はつぶやく、「——仲島弥五郎に前林久之進、奸物ども」

そうして、かれら奸物どもの風貌を思いだしてみる。黒藤源太夫は五十二歳の次席家老、仲島弥五郎は四十五歳で留守役上席、前林久之進は五十歳で国許用人。これらが藩政を毒する中心人物で、なканずく黒藤と仲島とがその首魁であった。むろん十郎太はかれらを知っているし、その風貌もありありと眼にうかぶが、同時に「日日平安」などと云う、のんびりした伯父の顔が見え、自分を江戸へ追い払ったことなども頭にひっかかって、どうにも闘志がわいてこないのがあった。

「とにかく戻ってからのことだ」と十郎太はつぶやいた、
「——いやなら紙入だけ取って江戸へ帰ればいい、戻って

みたうえて肚をきめよう」

菅田平野はいい心持そうに眠っていた。

明くる日の十時ころ、二人は城下町へ向って宿を立つた。十郎太は江戸へ追放されたのも同様だから、夜にならなければ町へははいれない、藍川の宿から城下までは五里足らずで、早く宿を立つわけにゆかなかったのである。心配した勘定のほうは払えたけれども、あとにはわずかしか残らなかつた。それで握飯をつくってもらい、宿を出るとすぐ裏道へ曲つた。街道をいって、もし家中の者にでも会つては悪いからである。丘を越えたり畑の間をぬけたり、途中の山陰の泉のわくところで握飯を食べたりしながら、石鉢山まで来たが、まだ時間が余つた。そこは山といつても高さ百五十尺ばかりで、城の東北に当り、城下町がすぐ前に眺められる。二人はそこで日の暮れるのを待つたうえ、夜の八時ころに町へおりていった。

石鉢山のほうからはいると、武家屋敷の裏にゆき当る。

陸田家は大手筋の塔ヶ辻という処にあり、その構えは三十間に四十間ばかりの広大なものであった。北面に正門。西に馬入れの門。三方に築地塀を回らし、南側の濠に沿った一方だけ黒く塗った柵になっていた。柵の内側は杉の深い林で、その杉林が邸内の半ばを占めている。築地塀の外からもそれらの梢が高く、くろぐろと夜空をぬいているのが見えた。十郎太は濠に接した築地塀の端までゆき、そこから柵のほうをのぞいた。濠は兩岸を石で組んだ幅二間ばか

りもので、かなり豊かな水が音を立てて流れている。風のない暖かい夜で、さあさあというその水音が、杉林にひっそりと反響していた。

「ここから入るんだが」と十郎太が柵の一部を指さした、
「——貴方も入ったほうがいいでしょう、人が通ってみつかるとうるさいから」

菅田平野は頷ぎいた。

柵の一本が動くようになっていた。たぶん肅清派の仲間がひそかに出入りしたのであろう、菅田平野はそんなふう想像しながら、十郎太のやりかたをまねて、柵の中へ入った。

「ここで待っていて下さい、いちおうようすを見て来ます」

十郎太はそうささやいて、杉林の中の踏みつけ径を向うへ去った。菅田平野は待っていた。あたりはまっ暗で、湿った空気は重たく杉の匂いがした。

「おれは遁さないぞ」菅田平野は口の中でつぶやいた、
「おれは遁さない、この蔓は決して遁さない、あの男をそれのかして必ずものにしてみせるぞ、城代家老の婿とくれば本筋だからな、うん、そうやすやすと見遁せるもんじやないさ」

四半刻以上も時間が経って、どうしたのかと思っているところへ、十郎太が戻って来た。暗いのでよくわからないが、荒い呼吸やおちつかない動作で、彼のひどく昂奮して

いることが菅田平野にわかった。

「貴方の予言が当たりました」と十郎太は云った、「——どうかこっちへ来て下さい、相談にのってもらいたいことがあります」

菅田平野は黙って十郎太についていった。黙ってついてゆきながら、彼は心の中でほくそ笑み「しめたな」とつぶやいていた。

「貴方の心配されたことは杞憂ではなかった」と十郎太は歩きながら云った、「——奸物どもは急に逆手を打って、昨夜この屋敷へ踏ん込み、伯父をどこかへ拉致したそうです」

「城代家老その人をですか」

「いまこの屋敷はかれらの手で押えられ、伯母と千鳥も一室に監禁されて、一味の者に見張られているというのです」

「たぶんそれは」と菅田平野が云った、「——井坂さんが江戸へ帰られたのを誤解したんでしょうな、自分たちの悪事を江戸へ報告にいったというふうには」

「こっちは、静かにして下さい」

杉林を出た左側に大きな建物があった。その向うに厩があると思え、馬たちの鼻をならす声や、地面を掻く蹄の音が聞えた。十郎太はこちらの、大きな建物の中へ、菅田平野を伴れこんだ。それは馬草小屋であった。中へ入って引戸を閉めると、甘酸っぱい乾し草の匂いでむせそうになっ

た。

「こいそ、と十郎太がささやいた、「——どこにいる」

返辞はなかったが、乾し草の山の陰から（袖で提灯を隠しながら）一人の娘が出て来た。十八ばかりの、小柄な軀つきで、眼鼻だちのちまちまとした、いかにもしこそくな顔をしている。十郎太は彼女を「千鳥の侍女こいそです」といって、菅田平野にひきあわせた。

こいそは二人の前でもういちど話した。

「菊井六郎兵衛という大目付の方が指揮で、三十人ばかりの人が来ました」とこいそは云った。「——ゆうべのちゅうどいまごろで、旦那さまは庄野主税さまと御対談ちゆうでした」

踏み込んで来たかれらは、三手に分れて、菊井ら十人は陸田精兵衛と、客の庄野主税を取囲み、他の一組は家士たちを長屋へ押込め、もう一組は邸内の警備に当った。菊井らは主人の居間を搜索して、多数の書類を押収したうえ、精兵衛を（客もいっしょに）用意して来た駕籠へ乗せてつれ去った。陸田夫人のおの女は温和で気の弱い人だが、さすがに怒って理由を問いただした。しかし菊井六郎兵衛は相手にならなかった。

——私はなにも知りません、御家老に汚職の事実があり、それが暴露したそうで、罪状の湮滅を防ぐために非常の処置をとるのだと聞きました。

こう云って、おの女と千鳥をも各自の居間に監禁し、

（一人ずつ看視者を置いた）召使たち全部にも嚴重に禁足を申し渡してたち去った。いま正門のところ二人、邸内に五人、見張りの者がいるということである。

「戻って来てよかったですな、ええ」と菅田平野は溜息をつけて云った、「——私が貴方を呼びとめ、貴方が紙入を忘れたことがわかった、そのためにこういう、その、危急存亡のばあいに、まにあうことができた、いやまったく、世の中にはなにが仕合せになるかわからないようなことがあるものです」

四

夜半を過ぎたであらう、こいその運んで来た握飯を食べ、茶を飲みながら、二人は対策を練っていた。事態は急を要する、黒藤ら一味の謀略が完成するまえに、事を輓回しなければならぬ。十郎太はあせった、けれども菅田平野はおちついてた。

かれらは陸田精兵衛を拉致し、居宅から書類を押収していった。これはなにが目的であるか、と菅田平野は考えた。菊井なにがしは「汚職の事実が暴露した」ともらしたそうである。たぶん自分たちの悪事を陸田城代になすりつけるつもりだろう、そうするにはいくつかの方法が想像される。「罪状湮滅を防ぐ非常の処置」とは、じつは罪状を城代に転嫁する工作で、最悪のばあいは自白書を強要したうえに、城代の命を縮める（自害という形式で）という手

を使うかもしれない。そうだ、こんな思いきった手段をとる以上、そのくらいのは予想しなければならぬ、と菅田平野は考えた。死人に口なし、もし精兵衛が強要されて自白書を書けば、かれらは精兵衛を生かしてはおかないだろう。いや、初めからそのつもりで「非常処置」なるものをとったのかもしれない。

——そうだ、たしかにそれに相違ない。

心の中で領ずきながら、菅田平野は鼻毛を抜いた。右手の拇指と食指で、巧みに鼻毛を摘み、呼吸を計ってくいつと抜き、そうして大きくしゃみをした。

「失礼しました」と菅田平野は云った、「——そこでうかがいたいのですが、井坂さんが奸物齋清をやろうとした計画と、その盟友の人数を聞かせてくれませんか」

十郎太は旅囊をひらいて、一通の封書を見つけ、中から巻いてある紙を取出した。

「これを見て下さい、それから説明します」

菅田平野は受取って披いた。それには次のようなことが書いてあった。

斬込隊指揮

井坂十郎太

寺田 文治 (馬廻七十石)

保川英之助 (徒士目付五十石余)

河原 源内 (同三十五石)

城がかり指揮

守島 仲太 (鉄炮組支配七十石)

関口兵次郎 (櫓番五十石余)

八田益太郎 (徒士組番頭六十石)

三方木戸

寺田乙三郎 (文治の弟)

広瀬 半六 (鉄炮組番頭五十石余)

島口 存平 (徒士頭五十五石余)

この連名には血判が押されてあり、奸臣誅殺の趣意が書いてあった。

「斬込隊は各分担の奸物を斬る」と十郎太は説明した、

「——木戸というのは城下町三方の口を押え、城がかりは大手、西、搦手の三門を固める、こういう手筈で、各組とも三十人から五十人の部下が集まる予定でした」

「なるほど」と菅田平野が云った。「——なかなかこれはゆき届いたものですね、ええ」

そして彼はまたじっと考えはじめた。

陸田城代は自白書を書くだろうか、「日日平安」などという暢気な人だから、高をくくって書くかもしれない。と菅田平野は考えた。しかしすぐには書くまい、いくら暢気居士にしても二日や三日はねばるだろう。子供ではないのだから、それを書けばどうなるかぐらいの想像はつくはずだ。これはかれらが自白書を強要するとしてのはなしだが、と菅田平野は考え続けた。

「この連名者のうちから」とやがて菅田平野が云った。

「——腕達者でもっとも頼みになる人間を五人選んで下さい」

「腕が立つといえ、まず斬込隊の三指揮者ですね、寺田、保川、河原、それから関口兵次郎と寺田文治の弟の乙三郎でしょうか」

「その人たちが貴方と共に、事を計った盟友だということ、かれらに知られていると思いませんか」

「そんなことは絶対でないでしょう、計画を勤づいたのは伯父だけですから」

「なるほど」と菅田平野は云った。「——ではひとつ夜明け前に、その五人をここへ呼んで来てもらいますか」

「五人をここへですか」

菅田平野は頷ずいて「危急存亡のばあいです」と云った。十郎太はすぐに決意した。危険ではあるが事は切迫している、それが必要ならそうしなければならぬ。こう思って身支度をした。菅田平野は慎重にやるように念を押して、なお、矢立と料紙を求めた。十郎太は旅囊の中からそれらを取り出して渡し、黒い目出し頭巾をかぶって出ていった。

「さて、これで位置は定まった」とあとに残った菅田平野は独りで呟いた、「——おれはまじめにならなければいけない、自分を英雄ぶったり、傑出した人物だなどと思ってもいけない、おれは単に腹のへっている浪人者だった、そうではないか、切腹のまねまでして、一食の銭にありつこう

としていた人間だ、決して英雄でもなければ大人物でもない、わかるか」そうして片手で尖った顎をなでた、「いまは軍師の位置についたのだ、これはもうたしかなことだ、あとはこのへぼ頭からどれだけの知恵が出せるか、しかもごく短時間のうちに、……これが問題だ、これだけが問題だ、ひとつ考えてみよう」

彼は提灯をのぞいた。蠟燭は（夜食のまえに替えた）まだ充分にある。彼は乾し草の束をいぐあいに直し、矢立から筆を抜いて、料紙をそこへひろげた。するとそのとき、ふいに引戸があき、明るい提灯の光りがさし込んだ。

「そこにいるのは誰だ」

こう云って、提灯をかかげて、一人の侍が入って来た。

おそらく黒藤一味の見張り役であろう、「邸内に五人いる」と云ったが、その一人に違いない。菅田平野はびっくりしたふうで（すばやく）自分の提灯を倒して消した。

「は、はい、私は」と彼はどもった、「——私は既係りの小、小者でございます」

「こんな時刻になにをしているのだ」

「はい、そ、それが、いま馬草を」

「なに、はっきり云ってみろ」侍はこっちへ近よって来た、「——いままじぶん馬草をどうするんだ、きさまうるんなやつだぞ」

菅田平野はおどおどと立った、侍は「こっちへ来い」と叫んだ、菅田平野はますます恐縮し、身をちぢめてそっち